

近代朝鮮における女性主体の形成過程

— 1890年代～1920年代印刷媒体に現れた女性言説を中心に —

一橋大学大学院
言語社会研究科
李貞恩

本論文は、近代啓蒙期から1920年代までの近代朝鮮の印刷媒体に出現した近代女性言説を分析対象とし、その言説から生まれた「新たな女性」が歴史的に構成されていく過程と、その意義を明らかにすると同時に、近代女性言説から女性の主体形成過程において、女性がどのような方法で介入し、主体性を構築しようとしたのかについて評定する研究である。特に、朝鮮女性の近代的自覚と主体化が、時代ごとにさまざまな意図で提起された女性言説の変化の過程に歩調をあわせて醸成されていったとの視点に立ち、当時の女性が近代的主体として形成していく過程と当時の女性の人生がどのような相関性を持っていたか、そして朝鮮社会で女性はどのような近代を経験したのかについて議論の焦点を当てた。

近年韓国の学術界では、近代社会を象徴する存在と考えられた女性たちが朝鮮社会の各領域に本格的に進出した1920年代から1930年代を中心として、「新女性」を研究しようとする試みが盛んになってきている。しかし、これらの研究のほとんどは、その前段階たる1890年代から1910年代までの女性研究を軽視する傾向を見せており、近代性の具現たる「新女性」とは、たんに近代的な教育を受けた女性という一義的な前提を研究の出発点としている印象を拭えない。本論文が近代啓蒙期から1920年代を研究の対象期間に選定した理由とは、「新女性」＝「新しい教育を受けた女性」という結論に膠着する研究枠の限界から離脱し、近代教育がどのように社会に現れ、なぜそれが近代朝鮮の女性意識と生活態度に変化をもたらしたかを包括的に探るためである。さらに踏み込んで、女性が社会に流通する言説を通して自分自身の主体形成に能動的に参入することの意義と、その過程で生じる心的葛藤および社会矛盾の壁をどのように経験し、打開しようとしたのかを明らかにする作業も必要である。

従って、本論文では近代女性に言及する言説の出現する時代に即して、近代朝鮮の女性がどのように主体を形成していったのかを追うために、これまで先行研究が軽視してきた1890年代から近代的諸制度の枠組みがある程度まで社会に整えられた1920年代までを研究対象にし、その時代に生きた女性たちをめぐる言説及び女性の主体形成の過程を明らかにすることで「新女性」を改めて定義することを目的にする。そのため、近代啓蒙期に出現した女性言説を契機として、朝鮮の女性が近代に生きることを自覚し、自分自身の女性としての主体性を主張しはじめていくようになるのと大枠を設定することで、1920年代までの女性言説と女性の主体形成の過程的関連性を論証する。

本論文は、第I部から第IV部の四部から構成される。第I部では、前近代の婚姻制度と相続制度における女性の地位と生活を取り上げた。高麗時代における家族制度・相続習慣

と女性の関係について考察したのち、朝鮮時代に入って儒教制度を基盤とする家父長社会が女性の地位をどれほどまでに低下させていったのかを明らかにした。そして、前近代社会が揺れ始めるきっかけをもたらした近代化の先駆者たちを探り、時代と活動分野別に彼らが形成した「新しい女子」観の内容を整理した。

第Ⅱ部では、朝鮮時代から近代啓蒙期に出現した近代女性言説の諸様相を整理し、それぞれの近代女性像を社会に提案した者たちの真意について、当時の社会コンテキストから明らかにした。第3章では、近代啓蒙期の朝鮮国内で社会活動に従事していた西洋宣教師が、朝鮮社会に相応しい「新しい女子」観を成り立たせようとした活動を取り上げ、それが当時の女性たちにどのような影響を与えたのかについて論を追った。第4章では、植民地時代、日本から持ち込まれたと見なされている「良妻賢母論」と植民地朝鮮の女性主体の形成過程との関係性を探った。具体的には日本の植民地政策、制度面における「良妻賢母論」の影響度を史的に評定した。第5章では、近代女性言説から生まれた「新しい女子」像が社会的実体として結実した「女学生」の存在意義に焦点を当て、国外に学び先を求めた女子留学生の出現要因を探った。

その結果、社会が近代化を目標としている時代にあっては、女性も男性と同様に教育を受け、公的活動に参加できる機会が生じたように見えた。しかし、この機会は男女間に同等に適用されなかった。女性には、近代教育を受けるべきと名目的な機会が与えられただけで、現実に彼女たちが会得した新しい知識とは、徹底して家庭内での子女教育と夫の内助に益するものだけに限定されていた。近代の社会においては、家庭内での役割こそが女性の社会的義務と責任だと規定されていたのである。ところが、近代教育を受けた「新しい女子」のなかにも、女性の社会進出が子女教育と夫の内助に資する分野に限られている事実気付いた女性がいた。いまだ社会に色濃い儒教的家父長制と被植民地支配という朝鮮社会の現状のなかで、自我に目覚めた女性は、自己を実現する場を朝鮮で探すのに苦労していたため、日本への留学を選択したことが明らかになった。

第Ⅲ部では、近代朝鮮を三つの時代に分け、各時代の印刷媒体を通して提示された近代女性言説がどのように生み出され、どのように変化してきたのかを考察した。三つの時代区分とは、それぞれ近代啓蒙期の1890年代前後、植民地となった直後の1910年代、近代化進行期と考えられる1920年代である。

第6章では、1890年代前後、女性に関する問題提起と自覚を世論形成させるために、最も目立った活動をした『独立新聞』と『帝国新聞』を取り上げた。二つの新聞の発行に関わった人物たちのほとんどが開化派知識人であって、彼らは『独立新聞』と『帝国新聞』の論説を通じて新たな女性観を提示し、それを近代啓蒙期朝鮮に定着させようとした。このような女性像は、19世紀半ばから1910年代初頭まで続いていった。つまり、朝鮮末期に創刊された『独立新聞』、近代啓蒙期に創刊された『帝国新聞』、そして植民地期の日本の教育政策が同じ脈略を取って、近代朝鮮に新たな女性像、すなわち「良妻賢母論」を提示したのである。彼らは、良妻賢母こそ、女性の生物学的本性に従う天職であると考え、近

代社会を導く男性に相応しい女性になれるように近代朝鮮の女性に良妻賢母論を伝え、「新しい女子」の役割を付与した。このような『独立新聞』と『帝国新聞』の活動は、近代朝鮮女性を近代に目覚めさせたきっかけとなり、後に「新女性」言説を生み出す土台を作ったと考えられる。

第7章では、日本滞在中の近代朝鮮女子留学生たちが創刊した雑誌『女子界』を取り上げた。『女子界』の論説から生み出された「新女性」言説を抽出することで、彼女らの女性像が、いかに近代朝鮮女性の意識変化に貢献したかを考察した。日本に留学していた「新しい女子」は、日本で近代的知識を経験しながら、その個々の経験を土台にして、近代朝鮮の女性たちに覚醒を促そうと雑誌『女子界』を創刊した。当初から近代朝鮮の女性を読者層として設定し、近代朝鮮女性の覚醒を促す目的で創刊された『女子界』は、完全なハングル表記によって編集され、掲載論説の可読性を高めていたばかりか、論説のほとんどは、当時の朝鮮社会における女性の問題として、女子教育や旧慣習の弊害について扱っていた。これは、『女子界』が女性読者の現実を大いに意識していたことを意味しており、女性読者の一人ひとりが自分の置かれている社会の問題にたいして自覚するように促していたのだと考えられる。このような『女子界』から発せられた朝鮮女性への呼びかけは、近代朝鮮社会と女性の啓蒙の局面に多大な役割を果たしていたと言える。そして、日本への女子留学生が推進した近代に来るべき女性像は、朝鮮の女性に新たな女子認識と行動様式を生じさせ、朝鮮社会に「新女性」が現れるきっかけを作ったと考えられる。

第8章では、1920年代に『時代日報』紙面にて掲載された4コマ漫画「マリアの半生」を取り上げ、「新女性」と「モダンガール」の生活を追っていった。日本へ留学した女子学生が植民地朝鮮へ帰国した1920年代から、近代化の象徴者としての「新女性」が現実社会に現れ始めた。そのような「新女性」に向けられた社会的反応を読み解く資料となるのが「マリアの半生」である。「マリアの半生」のなかで、「新女性」のマリアは、儒教的な家父長社会を拒絶し、男性との自由恋愛を尽くしながら、資本主義化する社会で消費主体となる生活様式を選択する。さらに「マリアの半生」では、「新女性」マリアの自立的行動と新規な生活様式の他に、奢侈・性的逸脱・虚栄のイメージに彩られた「モダンガール」に変化していくマリアまでも描き出しされていく。しかし作者は、「新女性」のマリアでも、「モダンガール」のマリアでも、マリアという女性が自分を取り巻く現実が目覚め、自覚した女性主体として成長していくさまを描こうとしていた。これは、マリアが近代的個人になるために「自覚」が必要と描写されたように、近代朝鮮において「新女性」、あるいは「モダンガール」になるために、なによりも求められたのが、女性自身の「自覚」だったことの表れであったと考えられる。

第IV部では、各時代に現れた「新しい女子」、「新女性」、「モダンガール」という近代朝鮮の女性言説が、当時の女性と社会にどのように反映されたかを探りながら、その中で女性が近代的主体として形成されていく過程を明らかにした。開港より出現した初期の近代女性言説は、女子の主体性という局面において男子知識層の思惑が大きく作用

し、女性の近代的規範を良妻賢母に合致させようとしていた。ところが、女性は自分自身のアイデンティティを男性中心の近代空間に投影して、そのなかで自己を実現しようとしたのである。それが女性自身による女性の主体形成の試みであった。女性の主体形成の社会的過程は、伝統的家父長社会への否定と批判の意味を持っており、彼女らの目標は時代の経過と共にますます拡大し、女性自身が能動的に社会文化を導こうとする象徴的な存在にまで高められていった。それが「新女性」の誕生である。「新女性」は、自由に恋愛し、自由に結婚し、資本主義社会で消費主体となり、公的領域での経済活動に参加するなど、さまざまな活動と表現方法をもって、社会に自分自身の主体性を定立していこうとした。男性はこのような「新女性」に対して、奢侈・虚栄・逸脱といった否定的な先入観を形成し、彼女らを「モダンガール」と呼び習わすことで、社会的非難の対象として扱ったことが分かった。

従来の研究が、対象として取り上げる時代・方法論に偏りを持っていたのに対し、本研究は時代を大きく三つに分けて、それぞれの時代の印刷媒体から出現した女性言説と女性像について歴史的な総体性の把握を追求した。それによって近代朝鮮社会において、女性の主体形成が一貫した連続的過程であったことを例証し、近代女性言説から近代女性が現れた多様な要因とその内容を探りながら、近代女性とは自分自身が社会的な主体であることを掲げ、着実に実現していった存在であったことを明らかにした点で、本研究は研究史的な意義を持つと考えられる。